

# 随 想



カット／「北野町」にて 永沢まこと

## 神戸と

## ニューヨーク

## 永沢まこと

△ニューヨーク在住画家▽



ニューヨークに住むようになってから六年になります。五月、そこへ神戸店でひらいた「永沢まこと NEW YORK, NEW YORK 展」のため初めて神戸へやってきました。

まず会場の下見に来たとき同行したのは、私のワイフで物書きである宮本美智子、彼女はニューヨークの暮らし十五年で、もちろん神戸は初めてです。それに私たちの友人で女優の十朱幸代さん。彼

女もニューヨーク暮らしをしているので、三人共街を歩いた感想がどうしてもニューヨークとの比較になります。三人で一致したのは神戸が

「ニューヨークに似ている」ということでした。何よりも日本の都会としては珍らしくインターナショナルな雰囲気、街じゅうに

泌みこんでいます。長い間「異人」を受入れてきた伝統なので、これが移民都市といわれるニューヨークと同じ、おい、感じさせるのです。

もう一つは港町特有の海の香りです。太平洋と大西洋のちがいはありますが、波止場や倉庫、建物の陰に見えかくれる海と船の風景は神戸もニューヨークも同じです。歩いてみて横に短く、たてに長い神戸の街は、これまたちょうど

マンハッタン島を横にしたような具合です。

神戸については先輩格の十朱さんの案内で、神戸ステーク、おさしみ、宮水のコーヒ、あなご等々、あっちこっち食べ歩きするうちに、「うーむ、食べものに関しては、ニューヨークよりいいね」ということになりました。

ニューヨークのレストランは、さすがにアメリカなので材料は豊富なのですが、それを調理し、さらにサービスする労働力の質が、年々悪くなっているのです。

手ぎわよく、流れるようなこしらえと、気くばりのきいたサービスを神戸のレストランやお寿司屋さんで味わいながら、あの延々と待たされ、つつけんどんにあつかわれ、やっと出てきた料理も間違った品だったり、皿がよく洗ってなかったり……といったニューヨークのレストランでの我慢の数々を思い出したものです。

グリニッチ・ビレッジ



お腹一杯になった私たちは、かねて噂の無人電車ポートライナーに初乗り。三人共ただもうビックリです。とうとう「ニューヨークは遅れてるわネ！」というワイフのため息まで出る始末です。

それも当然です。ニューヨーク地下鉄の暗くすすけて落書きだらけの車体と、横にねそべったのんだくれの浮浪者の姿を、ポートライナーの磨かれたようなピカピカの車体や、洗たくのきいたま新しい服を着た乗客の姿とを比べるのは、あまりにも差がありすぎるのです。

昔は、ニューヨークやパリなど、外国へ出かけるのがおのぼりさんだったのですが、ニューヨークから神戸へやってきた気分は、気がついたら、まさにおのぼりさんそのものでした。

## —コプクンカー—

岡 翠

△自由業△



私、行くスコータイ、食べるこれ、そんな覚えたてのタイ語から私の旅は始まりました。

二月の寒い日本を後に、マイナスからプラスの国へ。凍えていた

全てを溶かす太陽に迎えられ、驚く程のエネルギーを与えられ、私はバスに飛び乗ります。

早くお乗り、引き上げてくれる車掌さん、猛スピードで走りながら、お寺を見るとハンドルから手を離し、大急ぎで手を合わせる運転手、扉のない入口からこぼれ落ちそうな乗客達、その中を、物を売る行商の声、皆ないいききと動いています。

騒々しいバンコクを抜けだすと広い平野が続きます。人々のゆるやかな時間をくぐりバスは走ります。「どこから来たの。」「日本から。」「どこへ行くの。」「スコータイへ。」「一人で来たの。」「うん、そうよ。」「どこに泊るの。」「まだ決めてない。」「それじゃあ、うちにお泊りよ。」「そんな会話を誘われて知り合ったばかりの彼女の家へ。本当に大丈夫かしらと思いつつ、一人で知らないホテルに泊るよりは、そう思いながらも不安で、寝る前にせめて帰りのバス賃だけとはそつとズボンに隠します。

何が起るか分らない、転んでも泣かないぞ、そんな決心を胸に旅立ったはずが、結果は予想と大違い。人はやさしく、転ぶ前にいつも手を差し出してくれるのです。

あくる朝、仏教遺跡を歩きながら仏像を見上げると、「お前はとても小さいね。」のんびりとほほ

スコータイ・仏教遺跡にて  
えみかけられ、親切を疑って、と謝ります。

さて、次はどこへ行く。チェンマイへ、国境の町ナコンパノムへ、スコータイを振り出しに私の旅は北へ東へ続くのです。この山の遠く向うには中国が、この山の向うにはインドが続く、まだ見ぬ土地に思いを馳せ、風に触れ、音に触れ、人と出合うそのたびに、私の心は鳳仙花の種のようににはじけます。私にもこんな気持ちがあるなんて、内なる野性は目をさまし、種はどんなにはじけます。

喧噪と静寂と、複雑さと単純さ、豊かさと貧しさ、高層ビルの建ち並ぶ都会から乾期には砂土だけの農村地帯まで、太陽が強く照りつける程、光と影はくつきりと次第にその姿を現わします。逆らいきれない都市化の波を、今も続く伝統の波を受けとめながら、それでも人々はしたたかに地面に根を張り生きています。人はいかに生きるかを彼らは知っているのです。

例えようのない波にさらわれて二週間の積りがいつの間にか六週間。大陸の、タイの不思議に魅せられて私は夢中で走りました。驚



きや喜び、失望、数えきれない出来事にそれでも多くの希望を与えられ、私の旅は終わりました。

そうして、一体これからはじけ散った私の種は、タイで、日本でどんな芽を伸ばすのでしょうか。

決して枯らす事のないように、今はただ、私のタイにコブクンカささやかな礼節をこめてありがとうございます。

\*コブクンカはありがたうの意味です。

## 水と時の流れ

小泉八重子

△俳人△



あの日、武庫川の松林を吹き抜ける川風は冷たく、蕭々たる松籟を誘っていました。十年前の昭和四十九年、第一句集『水煙』によってブルーメール賞（文学部門）を受賞した時のことです。

本誌、米田カメラマンに幾枚も写真を撮っていただいたことを今鮮やかに思い出しています。まだ極寒の二月中旬に「なるべく春の服装で…」という注文で薄着をし武庫川畔の厳しい寒気に震えてしまいました。その上、プロのカメラマンの被写体になるという緊張と

興奮でコチコチになっていました。が、米田さんも、もう一人の女性記者の方も親切でやさしく精神的ぬくもりを強く感じました。米田さんはあれからもう、どれ位の方々を撮り続けてこられたことでしょうか。

十年経過してこの程第二句集『水霽』（湯川書房刊）を上梓しました。私の内面風景も、武庫川の兩岸の風景も全く同じ時の流れを刻んだことになりました。武庫川の変り方は一目瞭然ですが人の内面変化はそう簡単ではありません。進んだり佇ち止まったり、或は屈折したり逆行したり……。平和な時間と共にやすやすと流されまいと無為な抵抗を試みたりするものなのです。その揺れ動く抵抗感が私の場合は「俳句」の底の方に結びついているように思われます。

『水霽』はごく単純に「すいひ」と読むのですが、もっと別の読み方をするのでは、と多くの方に尋ねられました。国会図書館や俳句文学館からはわざわざ返信用封筒を添え、「ルビを打って返送するよう」と言ってこられ恐縮しました。「水霽」の意味は一口でいうと八水上の霞がかった不透明な情景△ということになります。そこが海か川か湖か池か、明示はしていませんが、とに角水の上の茫々とかすんだ状態なのです。そして

言葉の内容はそうのように濡れたものでありながら「すいひ」という語感ほむろ乾いていて凛とした響きがあることが気に入っています。更に「霽」という文字を分析すると雨ガシムリに非ズ、つまり「雨ニ非ズ」なのです。では一体何なのだ、という疑問や謎が起るところが面白いと思います。

飯橋の最後のひとり霧となる  
霧水林四肢ゆつくりと見失ふ

跋文を書いていたいた和田悟朗氏は水霽という言葉を現わす作品としてこの二句をあげておられます。二句とも霧の流れの中に人の姿が見え隠れして、やがては消えてしまいうさまを描いています。けれど霧の向うの人は見えなくなっただけであって確かに霧の中にいる訳です。

そのあたり、存在と非存在の境目、確かさと不確かさ、そして見えるものと見えないもの……。それらがさりげない俳句の十七音の枠の中でどこまで表現できるでしょうか。公園のように整備されてしまった武庫川畔の景色をまた思い浮かべながら、そんなことを考えています。

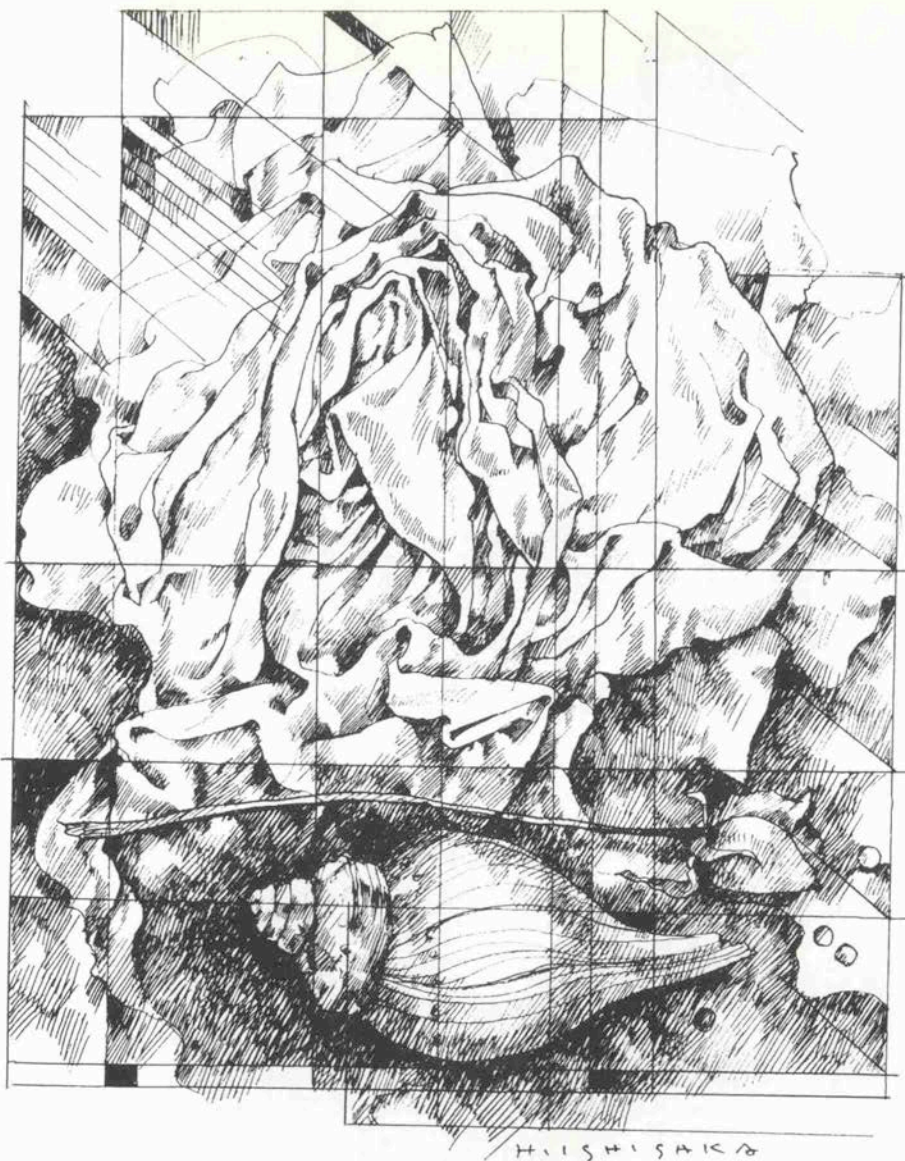
「水霽」 小泉八重子

湯川書房刊 3000円



# 詩心象

詩・安水 稔和  
画・石阪 春生



## 大きな川が

四百冊の詩集を積みあげて一冊一冊崩していく。丹念に眼で触わっていく。なつかしい詩人よ。詩人たちよ。ことばがきしむ。ことばがうねる。ことばがもえる。時代の空が垂れさがる。人間の肉声が突きぬける。明日のような昨日。

いつまでつづくのか。冬。痛む眼の隅に鳥の影が。いつしか花が。いつしか草いきれ。どこからか水の音。まざまざと川。や々と編みおわった詞華集の結句。「人びとの軀から流れがはじまる」<sup>(註)</sup>からだ。からだから。おもわず声が。

『神戸の詩人たち―戦後詩集成』は今は亡き山村順・竹中郁・坂本遼から戦後生まれの季村敏夫・梅村光明・時里二郎・大西隆志まで四十八人の詩人たちの戦後の詩業を収めたアンソロジー。今年六月刊行予定。(註)は大西隆志の詩「いま、大きな川が……」から。

□エッセイ□

# 黄金時代の夢

野口武彦〈神戸大学文学部助教授〉

黄金時代の夢といっても、別に阪神タイガースのことではない。多少私事にわたって恐縮だが、わが勤務する神戸大学文学部の国文学科の話である。去る四月八日のこと、文学部が創設されて間もない頃の卒業生の面々が永積安明・島田勇雄・猪野謙二の三先生を囲む会をポートピア・ホテルで開催した。三先生ともめでたく古稀を迎えられたのである。かくしゃくといった形容がかえって失礼にあたるような若々しきで、さすが長年きたえあげた学問の底力を感じさせられた半日であった。卒業生の側も、もうそろそろいわゆる管理職クラスの年齢層である。甲が乙の髪の薄さを評すれば、乙は甲の腹の出具合で応酬するといった塩梅で、三先生が古稀を迎えられるまでの歳月は、これらもと学生諸君にも決してゼロだったわけではなかった。かく申す筆者も、もちろんひとのことをいえた義理ではない。これから黄金時代の話になる。

当日は筆者も御招待のおこぼれにあずかったのだが、会場での旧師弟の心あたたまる交歓風景を眺めていて、つくづく羨しく感じたことがあった。長い年月が経ってからも保存され、生き生きと再現されているありし日の教室での一体感である。

『平家物語』の永積、西鶴語法論の島田、そして近代文学の猪野といえ、当時——いまでももちろんそうだが——打ち物取っては並ぶ者のない全国でも有数の顔ぶれであった。この陣立てのもとで勉強できた往時の学生諸君は幸運である。黄金時代という感想はそこから生まれる。それにもうひとつ、時代そのものが若かったという条件もあるだろう。戦後もすでに四十年。いちばん新しい世代の学生には「戦後」という言葉さえもうびんとこないようになった現在から思うと、昭和三十年代、四十年代は、学問の世界がまだ若々しかったといえる。特に日本文学研究の分野では、主題面でも方法論の上でも、未開拓地がいくらでもあった。荒々しいくらい元気な、野武士的な雰囲気がかそこかしこにあった。

とりわけ神戸大学文学部は、文字どおり草分けの時期であった。筆者がこの大学に最初に来たのは、一九六〇年前後の政治の季節のさなかであったが、当時の文学部校舎は、いまは御影工業高校が建っている場所にあり、まさに草分けというにふさわしいオンボロの建物だった。そのときはまさか八年後にここに赴任してこうなどとは知る由もなかったが、いまにして思えばあれが三先生





写真中央左より猪野謙二、永積安明、島田勇雄の三先生を囲んで

の壮年期に、いや、師弟こぞっての大学の青春期だったのだと、いささかの感慨なきをえない。黄金時代は、ただ教師の力だけで実現できるものではないだろう。師弟ともにする一体感がそのための不可欠の条件だったのである。そして、疑いもなく、そうした時代の青春期に特有の熱気が、あのオンボロ校舎にはみなぎっていたという気がする。

だからじつをいうと、三先生御退官の後を引きついで現役の教師はたいへんやりにくいのである。きらいなチームを物のたとえにするのはいかにも気がひけるが——何しろ阪神タイガースはあまり優勝したことがないので——あなたも長島・王なき後の読売ジャイアンツをあずかったような気分なのである。もちろん

大学のことだから、何が何でも優勝しなければならぬという至上命令があるわけではない。だいいち優勝するとはどういうことなのか、野球チームのたとえを使っている当人にもよくわからない。わかつているのはただ一つ、三先生御在籍のみぎりにはともかくも第一期黄金時代がわが国文学科にはあったということであり、第二期が果してくるのやらはなはだ心もとないけれども、OBたちの注文はきびしいだろうということである。

七〇年安保、学園紛争の世代に共通一次世代が入れ替り、学生たちの気質もずいぶん変った。ちょうど十年前にはヘルメット学生からさんざん批判を浴びた大学教師連だが、最近ではその全共闘の世代をも「パラノ人間」として批判する「スキゾ人間」の新世代が進出してきた。現代の若者風俗をあげつらう流行語には最近事欠かない。いわく、「ピーターパン・コンプレクス」、いわく、「青い鳥症候群」、またいわく、「モラトリアム人間集団」。そうした現象が見られるのも事実であるが、同時にまた、せっせと勉強して着実に単位を取り、自分に向いた仕事を見つけて社会に巣立ってゆく学生たちが多数派であることもそれ以上に事実である。要するに、わが国文学科は毎年まあ正常な再生産機能を維持しているのである。現役教師たちもいずれば停年を迎えるのだし、運がよければ古稀まで生きのびて、ひょっとしたらお祝いの会を開いてもらえるなんてこともあるかもしれない。その折には、黄金時代といわれようなどと大それたことは思わないが、せめて「ベンチがアホやったから」といわれることがないように、これから非力をつくしてがんばります。

三千年の歴史が眠る  
森の都ソフィアは、  
ヨーロッパ最古の  
都市のひとつ。  
フレスコ画に  
彩られる最古の  
寺院リラの僧院。

ブルガリアの  
聖域をゆく



10日の旅

東欧の古都ソフィアとマケドニアの遺跡を訪ねて  
特選 **ソフィア・アテネ** + シンガポール  
¥385,000より(小人¥367,000)より

スケジュール

- 午前：大阪発シンガポール着(夕刻)  
シンガポール発(機中泊)
- 午前：アテネ着(着後アテネ市内観光)  
[アテネ泊]
- 午前：アテネ発 → テサロニキ着  
ソフィア着 [ソフィア泊]
- 1日：ソフィア市内観光(民族舞踊見  
ながら夕食) [ソフィア泊]
- 午前：ソフィア発リラの僧院 → テサ  
ロニキ(ブルガリア最古の寺院)  
リラの僧院観光 [テサロニキ泊]
- 午前：マケドニアの遺跡及びアレキ  
サンダー大王の遺跡観光  
午後：テサロニキ発 → アテネ着午後  
[アテネ泊]
- 出発まで自由行動  
夜：アテネ発シンガポール  
[機中泊]
- 午後：シンガポール着(着後ホテルへ)  
[シンガポール泊]
- 午前：シンガポール市内観光  
午後：自由行動 [シンガポール泊]
- 午前：シンガポール発 → 大阪着(夕刻)

出発日 ■ 旅行代金

7月=16日

¥385,000

(小人¥367,000)

7月=23日・30日

8月=6日・13日・20日

¥464,000

(小人¥409,000)

8月27日

¥398,000

(小人¥380,000)

●ホテルはデラックスです。

最低催行人員=15名 添乗員付き

全行程食事付(但し昼食1回、夕食1回を除く)

神戸 (078) 231-4118

●営業時間9:30~17:30 年中無休

主 池 日本交通公社  
神 三ノ宮支店  
(国鉄三ノ宮駅東降車口前)



※旅行代金は大阪発おひとり分です。  
※乗客数には、満員になっている場合もありますのでご了承ください。  
詳しい旅行条件はパンフレットでご確認ください。  
インテネットを希望の方は、旅行名・住所・氏名・年齢・電話番号を  
ご記入の上、〒651 神戸市中央区琴ノ緒町5-111-305  
日本交通公社 神戸三ノ宮支店  
エフ・神保までお電話でお申し込みください。



△その58▽

絵のまち

# 尾道四季展

米花 稔

△神戸大学名誉教授・福山大学教授▽

五年前この欄(その13)昭和五五年九月)にその春でできた尾道市立美術館を紹介した折、絵ころのある特定郵便局長さんによる地元風景画を配した暑中見舞の官製はがきの試み、尾道に住みついて生涯をおえた小林和作氏の毎年秋の忌日前後商店街ショーウィンドーによる美術展などにふれたものの、なおそれらの土地柄のユニークさが生かしきれないはがゆさをのべて筆を結んだ。

道を絵にし、古寺と文学のまちにさらに芸術の香りを加えようという、いわば都市の活性化のひとつの戦略というのであらう。老舗のまちが福山と三原にはさまれての再生への試みというべく、はじめにふれたようなこれまでの手がかりを足場としての飛躍の期待であらう。

ところがこの春、昨年夏以来全国に参加を呼びかけた第一回絵のまち尾道四季展が全市にわたって開催せられた。NHK西日本ダイヤルで紹介されてお気づきの方もあらう。全国の美術愛好家によひかけて、尾

テブカットの三月二日たまたま福山大学に行っていたので尾道に足をのぼした。市立美術館には大賞、金賞など入賞、秀作四〇余点、それに特別参加フランス画家数人、中川一政氏ら招待画家三〇名などが展示され、一般の出品作は、市内商店街のショーウィンド、喫茶店などに展示された。関東から九州まで九百余名のプロ、アマの画家が当地を訪れてこれを画にして千



P・アイズピリ<尾道>

ヤルで紹介されてお気づきの方もあらう。全国の美術愛好家によひかけて、尾



カシニョール<ONOMICHI>



山本文彦<千光寺山遠望>

四の百点の出品となつた。福山大学教授で日曜画家のひとりも参加しているのをみた。当日商店街の入口で市

鴨居玲<尾道夕景>

は、市内商店街のショーウィンド、喫茶店などに展示された。関東から九州まで九百余名のプロ、アマの画家が当地を訪れてこれを画にして千

長、商工会議所会頭ら主催者の挨拶があつて、賑かにテブカットが挙行された。

尾道といえは誰もすぐ思ひうかぶ尾道水道を下に見る風景をいろいろの角度からとりあげているものが多く受賞作にもみられるが、案外に旅人の気付かぬ尾道らしさをとらえているものも散見せられて興味深かつた。都市の自然と歴史、そして人びとの営みをよりどころに、個性的なあり方を求めて、全国の人びとに関心を惹きつけるという町づくりの戦略は、ユニークな試みとして成功裡の出版といえよう。

ただ気になったことは、商店街のショーウィンドの展示のあり方に、見るものとしては不満であつた。無神経な展示が、絵はもちろん、商品もふくめて、相互にこころしあっているものがすくなくあったのが、展示期間が一月月もあるだけに残念であつた。デザインに統一的な工夫があれば、出品作も、商店の商品も、ともに生き生きとすることができのにと思わされた。画龍点睛を欠くということであらうか。次回以後に、文字通りの商店街ギャラリーを期待したい。それはとにかく絵のまち尾道の今後の発展を祈る。

なお市立美術館展示分は、このあと北海道から九州まで巡回し、その間八月一日―十五日にそこう神戸店で展示される。御覧願いたい。



84神戸フランス週間

●特集／神戸の中のフランスⅠ

# 居留地時代の神戸とフランス

坂本 勝比古（千葉大学教授）

今年は神戸の外国人居留地が解消した明治32年7月17日から数えて、丁度85周年を迎える。神戸では7月2日から14日まで「神戸フランス週間」が開かれるという。これはフランス革命記念日のパリ祭に因んだものであるが、その故か「神戸っ子」の編集部から、居留地時代の神戸とフランスについて何か書けという依頼があった。神戸とフランスとの歴史的な関係についてはそれ程明らかなでないことが多い。正直に云ってイギリスやドイツに比べて、フランスは開港以来あまり目立った存在ではなかった。といっても開港以来フランス人たちが、神戸を訪れて百十余年を経ることとなり、その間にフランスやフランス人との交流がきわめて薄かったというわけではない。

さて、居留地とフランス人について語るとき欠かすことのできない功労者として、今から85年程前に活躍していたフランス領事フオサリユの名前が浮んでくる。ド・リュシー・フオサリユは、神戸の居留地発展のための献身的な努力を払った一人であった。



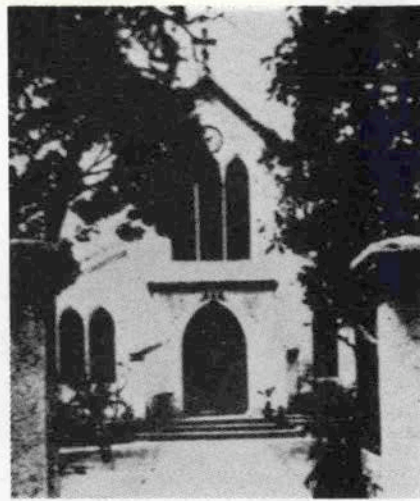
ビエール・ムニクウ神父

彼は7月17日の居留地解消のための授受式において、内外人の代表者を前に演説し、居留地会議の功績を讃えてつぎのように述べている。「30年前日本当局が我々外国人に神戸の居留地を引渡したとき、その地は真正正銘の砂浜で、海岸に向かって生え茂っていた松の木を取除いただけの荒漠とした一文の値打ちもないような場所でした。今日、私たちは、その同じ場所を、美しい建物が建ち並び、倉庫という倉庫には商品が溢れ、地価1フット平方（ $\frac{1}{2}$ ヤード）当り、10ドルもするという立派な町に変えて日本政府に返還いたします。……この町こそ、西欧諸国民の才能の真髄を示す実例であり象徴であります。その旺盛な進取の気風、倦むことのない企業精神、忍耐、倏約、そして商業経験、これらが、神戸の発展に大きく寄与してきたのです。云々」(The Japan Chronicle, Jubilee Number, 1868-1918 神戸外国人居留地、堀博・小出石史郎共訳より)

まさに神戸の発展は、居留地における外国人たちの働きに負うところ少くない。新しく造成された土地に西欧的な発想による都市計画をたて、街路をつくり、下水道を埋め、街灯を建て、公園をつくり、異人館を建てていった外国人たちの努力は大変なものであったと思われる。居留地は政治経済のうえでは大きな重荷であったが、社会文化のうえでは、日本の近代化のなかで、少なからぬ役割りを果たしたといえよう。

在留外国人を代表して挨拶をしたフオサリユについて、神戸市史は、「明治22年領事に就任し、神戸に駐在すること15年、其の間居留地のために幹施し、改正条約





居留地37番にあった神戸初のカトリック教会堂

実施の際には、内外人間交渉の衝に当り其功虧からず」と記してその功績を讃えている。

このほかフランスといえばフランス料理であろう。神戸でもっとも早くフランス料理を食べさせたのは「兵庫ホテル」などの外人ホテルであった。そのなかで、本場の味を出したのは「ホテル・ド・コロニー」であろう。何故ならばこの店主は、フランス人で第1回の入札のときに落札したカンダンベルによって、居留地15番に建てられたからである。その時期は明治3年の秋と思われ、場所は現在唯一棟残っている居留地時代の商館「ノザワ」本社のところであった。

彼の広告を見ると、朝食、昼食、夕食をとることができ良質のワインや酒の提供と第一級のピリヤードのテーブルをもっていると宣伝している。

オリエンタルホテルも開港間もなく、京町79番で営業を始めるが、このホテルも幾つかの変遷があつて、明治20年代では当時の経営者フランスのルイ・ビゴーが名コックで、フランス料理の美味なものを食べさせて評判であったという。そのためビゴーが帰国したのちも、オリエンタルホテルの存続が希望され、やがて海岸通り6番に明治40年壮麗な建物が新築された。

神戸に在住したフランス人が、どのような活躍をしていたかについて、明治37年の調査によると、24人の在住人数のうち、貿易商9人のほか、旅宿業1人、麵包商1

人（パン屋か？）、音楽師1人、食料品1人などとなっている。

また大正15年の神戸市商工課が調べた神戸外国商館案内によると、商館数90のうち、もっとも古い創業年をもつ商社は、フランスのオッペネル・エ・コムパニーで、代表者はイジドル・ビカールとなっている。神戸での創業は明治12年とあり、フランス商社は数が少ないが、息の永い商売を続けていたという意味で注目に値しようなおこの商社は現在でも存続し健全な営業を続けていいる。さらにこの商社について思い出すことは、オッペネル社メール社の専務であったフランス人、フランソワ・ブルーム氏のことである。彼が住んでいた山手の異人館の取り壊しに際して、明治村へ移築するのに苦心を払ったことや、また今から20年近く前のことであるが、ブルーム氏が故国に帰るに当って、神戸で過した思い出の日々を古ぼけたベランダに腰掛けていつ迄も語ってくれた時のことなどである。

もう一人、フランス人として忘れ難い人は神戸で最初のカトリック教会堂を居留地に建てたピエール・ムニクウ神父のことである。

ムニクウ神父は、1868年1月の開港直後に函館の布教から急拠、神戸へ派遣されて来た。第1回の地所のせり売りで、今の丸の内南側37番の地所を得て、早速ここへ神戸で最初のカトリック教会堂を建てた。その時期は明治3年4月であった。この間、ムニクウ神父の苦勞は並大抵のことではなかったという。この聖堂はラテン十字型の平面をとり、ステンド・グラスをもつ壮麗なゴシック風の会堂であった。ムニクウ神父はこのとき副司教に任ぜられ、将来を嘱望されていたが、在任僅か9か月の明治4年10月15日急逝している。神戸におけるカトリック教会発展の陰に、先人たちのこのような献身的な努力があった。神戸がこれから国際的な色彩を益々深めることを希望するならば、居留地を出発点とした内外人交流の歴史をさらに深く学びとらなければならない。





金い賞額はメルシー

'84神戸フランス週間

●特集／神戸の中のフランス《いんたびゅう》II

アンドレ・ブリュネ 神戸フランス総領事に聞く

## 神戸が文化交流の接点に

今年の3月5日、神戸フランス総領事のアンドレ・ブリュネ氏がフランス国家功労章オフィシエ章をフランス政府より授けられた。ブリュネ氏は、俳句が趣味という大の日本びいきで、特に芭蕉の句が大好きという。以前は通訳の職についておられたこともあり日本語は達人なものである。

—ブリュネさんは日本へ来られてどれくらいになりますか？

「私が日本へ来たのは、朝鮮動乱が終った頃、昭和29年6月15日なので、もう30年、日本に住んでいることになります。前世は、日本人であつたような気がするくらい私は日本が大好きです。(笑)

最初、東京にいたのですが、6年前神戸へ転勤してきました。神戸は、すばらしい景観に囲まれていて、朝起きた時、きもちがいいですね。食べ物もおいしくて、いろいろな国の料理が手軽に味わえます。それに日本人は、清潔で勤勉ですね。

フランス領事館は、神戸で一番古い領事館の一つです。明治元年に副領事館として発足し、明治40年頃に領事館、昭和30年に総領事館になりました。当時は、大丸百貨店のところに建っていたのですよ。神戸日仏協会も歴史が古く、明治40年頃に設立されました。」

—神戸も六年間でずいぶん変わりました。

「新しいビルもでき、すっかり美しく整備されました。都市計画がうまく進んでいるのでしょ。ファッショントウンを見ていると、確実に未来へ向けて、発展している街だなあと印象を受けますね。神戸は、『ファッショントウン宣言』をしています。その性格を明確にする方がいいと思います。

神戸の女性も含めて、日本の女性は、着こなしが上手になりましたね。以前は、少し変だなあと思う色合わせをしている女性が多かったですが、最近、そういう人も少なくなり、シックなおしゃれを楽しんでおられるように見受けられます。パリジャンにも負けないぐらいファッショナブルですよ



アンドレ・ブリュネ 神戸大阪フランス総領事

フランスのニューモードが日本でもすぐ紹介されるからでしょうね。

昔からフランスと日本は文化面で密接なつながりがありますね。日本から多くの人が絵や文学を勉強しに行っていますね。神戸在住の芸術家でも小磯良平画伯や詩人の竹中郁さんなどがそうですね。逆にフランスでも日本の影響を受けている作家がたくさんいます。画家のマチスは、浮世絵の影響を受けています。日本文化の研究は盛んに行なわれていますね。フランスでは日本映画祭があって、一年以上にわたって、500本の映画が上映されるのです。日本国内でも未公開の日本映画がかかることもあるんですよ。

——日本の文化についてどう思われますか？

「革命などによって、文化の流れがとぎれることなく続いています。昔からの伝統を維持している優秀な文化だと思います。」

日本人には、フランスというとすぐ芸術の国とファッションの国、農業の国だと思う人が多いでしょう。実際フランスは、西ヨーロッパの耕地の4割をしめているというのも事実です。

しかし、フランスは、技術面でも世界の先端を走っている国なのです。世界で最初に超音速旅客機を開発し、就航させたのはフランスですし、2年前には、パリーリヨン間に世界最高速を誇る鉄道、T・G・Vも走りましました。これは、日本の新幹線とよく比較されますが、私はライバルだとは思っていません。T・G・Vは飛行機の役割をしています。日本の新幹線は、地下鉄の代わりだと思っていますから。さらに光通信の研究開発も世界のトップクラスですし、国内の電力は、約4割が原子力発電です。この他にも例をあげると限りなくあります。」

——神戸について感じられることをお願いします。

「神戸は港町ですし、奈良、京都にも近いという立地条件を生かして、外国との文化交流の接点になってほしいですね。また神戸の人たちには、ホームステイの制度

を広げていってもらいたい。フランスから勉強に来たくても安い宿泊施設がないためにあきらめる人もいます。フランスの若者は、言葉、距離などの障壁はありますが、とても日本へ来たいと熱望しています。」

私は、日本へ来たフランスの若者が言葉で苦労しないように神戸にフランス人のための日本語学校を建てようと思っています。日本を学ぶにはまず言葉からでしょう。これが完成すれば、神戸の新しい名所になることまちがいありません。

日本の若い人も自分の伝統・言葉を大事にして、どんな外国へでいって、向こうの若者と語り合えばいいと思います。若い人同士ならばすぐに友達になれるでしょうね。互いの国のことが理解し合えると思います。

それから、レジャーについて一言。休日など寝ころんでテレビを見ているだけでなく、レジャーの時間をもっと有効に活用してほしいですね。フランスでは、勤務時間を短縮し、余った時間の利用方法を考えるレジャー担当省ができたぐらい、レジャーに関心が集まっています。本を読んだり、高齢者大学へ通う人が多くなる傾向にありますね。また、終身教育ということも最近よく言われています。

日本人も今は、レジャーの時間が少ないようですが、いっしょにけんめいロボットを生産しているので、やがてそのロボットが人間の仕事をするようになり、人は時間が余って、余暇の利用を真剣に考えなければならぬ時が来ると思います(笑)。日本では、クラブ活動やカルチャーセンターがよく発達しているので、それを利用すれば有意義に時間を使えるでしょう。

7月の初めから2週間程フランス週間が開催されます。フランス映画の上映、ジャンソンコンクールなど多彩な催し物がくりひろげられ、フランスの知られざる一面を知っていただく最適な行事だと思います。ぜひ皆さんも参加してください。」

△在神戸大阪フランス総領事館にて▽



会い集はメルシー  
84神戸フランス週間

●特集／神戸の中のフランス《いんたびゅう》Ⅲ

ジャン・メルオー 灘カトリック教会神父にきく

# 美意識が人と人をつなぐ

神戸在住35年、灘カトリック教会にお住いのジャン・メルオー神父は、英知大学で音楽学の教授もしておられる。パリの音楽院でオルガンの奏法を学び、幅広いコンサート活動で現在も活躍中。また、神父は食べ物にも目のないグルメ通としても広くその名を知られている。

—メルオー神父は、日本へ来られて、35年になられるようですが、ずっと神戸にお住いですか？

「ええ。最初の2年間、中山手のカトリック教会にいたのですが、灘カトリック教会をつくるよう命ぜられ、こちらへ移りました。

中山手の教会は、大正9年からあるんですよ。当時は港にも教会がありました。それは、百二、三十年も前か

らあったもので神戸では一番古いものでしょう。しかし日本人は入ることができませんでした。下山手にも教会はあったのですが、キリスト教をもっと広く布教するために、神戸に住んでいた外国人たちがお金を出し合ってきたのが中山手教会なのです。戦争の時、内部は焼けてしまったのですが、戦後、再建され現在に至っています。今は、観光の名所となり、訪れる人がたえません」

—教会を通しての文化交流が行なわれたようですね。

「神戸には、フランス人の建てた教会が多いので文化交流は盛んに行なわれていたと思います。教会では、キリスト教の布教を通じて、フランス語や音楽を教えていましたからね。教会はフランスと日本の文化の接点だったのですよ。

いま、フランスでも、日本の研究が盛んですよ。私自身、日本文化の将来やそのバイタリティには興味がつきません。この7月にフランス週間が神戸で初めて開かれるのは、楽しい話題でもあり、神戸とフランスのかかわりをもう一度考え直してみることができると思います。

ジャン・メルオー神父

神戸にはすぐれたフランス料理店や小磯良平画伯、西村功画伯のようにフランスの人物や風景を描いておられる優秀な画家もたくさんいますね」

—永年日本で暮されて、どんな点がいいところだと思いますか？





「日本は大自然に恵まれていて、どこを見ても『美』を感じます。そのためでしょう。私は、日本人の『美』に対する感受性は、フランスに負けないくらい鋭いと思います。私が出会った外国人はみなそう言います。」

フランスも美しい国なので、『美』に対する意識は敏感ですね。特にパリっ子は、独特のセンスを持っています。日本人もフランス人も『美』を追求する精神は同じだと思います。『美』を感じる心は、世界共通のものだと思います。美術館へ行って、フランス人、ドイツ人、日本人が同じ絵を見て美しいと感じれば、それだけで、心が通い合ったといえるのではないのでしょうか。一幅の絵から湧きでる『美』の泉に人々の心がひたって、一つの社会が生まれるのです。『美』は、言葉がわからなくても黙っているだけで、人と人をつなぐ架橋になります」

――神戸についてはどう思われますか？

「天候が安定していて、住みやすい町ですね。山と海の二つの自然の要素がたくみに融けあって、すばらしい景観です。山は四季の移り変わりを如実に表現してくれます。四季の変化は、フランスにもありますが、日本の方がデリケートですね。一口に春と言っても、早春とか晩春とか、細やかですね。」

また、神戸には、世界一の港があるせいか、西洋的要素がいっぱいあって、神戸へ来れば、海外旅行をしたような気分になりますね。神戸の人は、外国の影響をうまく自分の中に取り入れてますね。だから、神戸の人は、外国人を歓迎する心を持っていますね。それをもっと養ってあげば、神戸は日本で中心的な立場に立てますよ」

――神戸がことのほか気に入っておられますが、嫌なところはありますか？

「嫌なところは探してもみつからないほど神戸はすばらしい。しかし、ただ一つだけ、ほんの小さなことなのですが、工事が多いことには困りますね。(笑) 私が住んでいるところは、新幹線の工事現場の近くだったので一日中、トラックが走っていて、ひどいほこりと音でし

た。それが終わったと思ったら、今度は地下鉄工事でしょう。(笑) 神戸は工事が多いなあという印象がありますね。でも町が立派になると思ってガマンするしかありません。」

――神戸にこんなものがあればと思うことをご指摘下さい。

「外国人観光客にショーを見せるところがほしいですね。京都には祇園コナリーがあって、毎日、日本の伝統工芸を一時間の映画で見せてくれます。」

神戸は、国際港都ですから外国人を受け入れ、歓迎し日本を紹介する役割を担っています。だから、ぜひ神戸にそういうものが欲しいですが、神戸では毎日でなく、週末の金、土、日の三日間だけでもいいと思いますが。ガイドをお願いする神戸の方も仕事が休みの方がいいでしょう。

私はよく外国人観光客を日本料理の店へ招待するのですが、いつも彼らは料理の説明を私に求めています。食事の時間は、講義の時間でないので、説明するのに疲れます。そういう時、つくづく日本文化をショーとして見せて、解説してくれる所があればと思います。そういうものがあれば、神戸の名所にもなり、もっと多くの外国人が訪れると思います。

日本へ来た外国人観光客を日本のマナーで受け入れると彼らに深く日本を印象づけることができます。特に最初の二、三日の印象は深く自分の中に浸透しますね。

神戸の人は、ゆとりがあって、心よく外国人を受け入れることができるので日本文化を外国へ紹介するには最適だと思います。

神戸は、フランス同様、個人の自由や個性を大切にす町なので、外国人の受け入れ方をもう少し工夫すれば、さらに一層、すばらしい国際都市へ発展すると思います。それにしても、神戸はすばらしい町ですね。」

△神戸っ子編集室にて▽